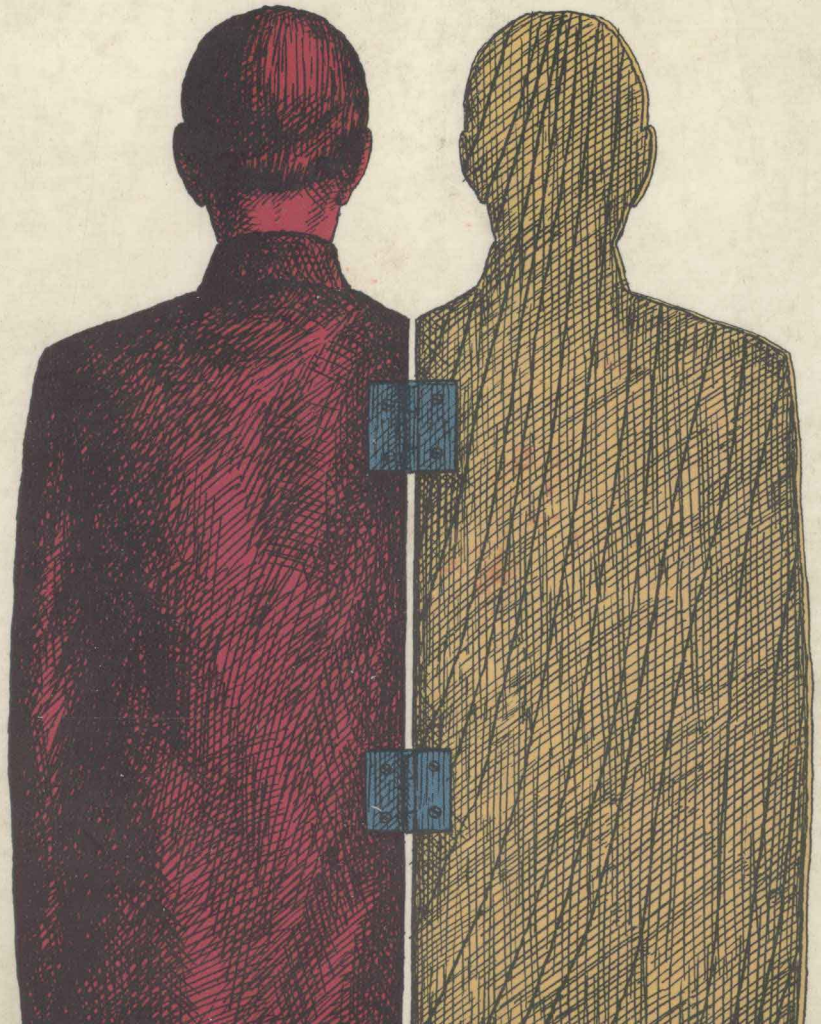
極楽の鬼

——マイ・ミステリ採点表（ジャッジペーパー）——

石川喬司



極楽の鬼――マイ・ミステリ採点表（ロッテクロスワーバー）――
昭和五十六年十一月十日　第一刷発行

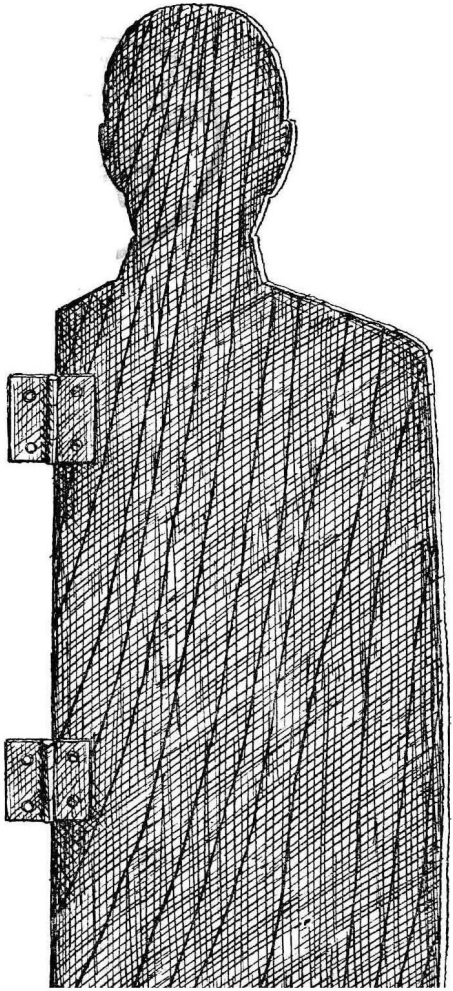
著　者　石川喬司
発行者　三木　章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京（945）一一一一（大代表）
振替　東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定　価　一六〇〇円
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
© Takashi Ishikawa 1981 Printed in Japan

ISBN 4-06-130798-3　（文2）

極楽の鬼

マイ・ミステリ採点表（ジャッジペーパー）

石川喬司



極楽の鬼

ベスト・テンごっこの苦しみ……9
もうひとりのマクドナルド……12
007とガガーリン少佐……15
名探偵ホームズの子孫……18
あたらしいミステリの女王……21
アンチ・ロマンと推理小説……24
巡回判事セシル氏の〝犯罪〟……27
カーター・ブラウンの世界……30
素顔のイアン・フレミング……34
名作表に洩れていた〝名作〟……37
何のために小説を読むか？……42
袋小路に陥ったスパイ小説……45
SFとミステリとのあいだ……49
〝一人四役〟トリックの試み……52
競馬は最高の推理小説です……55
大都会をうたうマクベイン……59
三島由紀夫の『Yの悲劇論』……63

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モスクワ市警の三人の刑事……67
世界で五番目の〝人気作家〟……71
新手の誘拐譚『夜に消える』……74
カーと親殺しパラドックス……78
雨のモンバルナスへの手紙……82
エラリイ・クィーンの苦悶……87

地獄の仏

なにから読みはじめるか？……90
スパイ小説は花盛りだが……94
〝しごと〟人間フレンチ警部……96
ナポレオン・ソロの面白さ……99
ジャック・フィニイに乾杯……102
悪党バーカーとハニー探偵……105
男性の最大公約数の夢を……108
マンガ・スパイの決定版……111
フレミング効果とはなにか……114
007号の後継者ごっこ……118
男はなにを必要とするか？……121

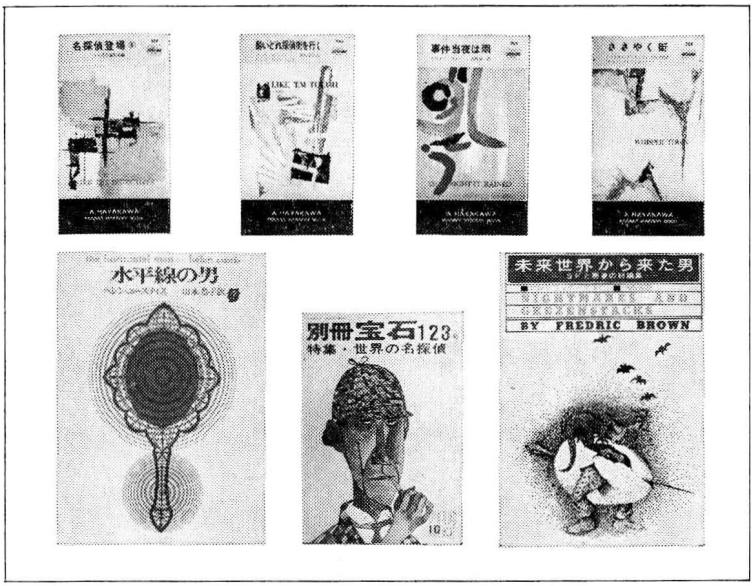
哲学的ソロ・ホームラン……124
ギャビン・ライアル登場……127
推理小説の未来をめぐって……130
初夜は二度と味わえないか……133
ノーベル推理文学賞の行方……136
レン・デイトン目覚める……138
恐怖と理性の弁証法とは？……141
SFとミステリの結合……144
完全犯罪をとりまく保護色……147
黒人刑事ティップスの活躍……150
女にミステリがわかるか……153
ホームズ＋近代捜査の魅惑……156
女房の身代金に幾ら払う？……159
C・ウィルソンの殺人小説……162
D・フランシスの初顔見せ……165
帰ってきた酔っぱらいの頃……168
チャンドラーかく語りき……171
西洋浪曲師VS嘘の料理人……174

金嬉老のミニ・クーデター……177
スピレインの最高傑作とは……180
ボコノン教は世界を救う……183
丹前でお茶づけの二世探偵……186
泥棒貴族における人間性……189
自作を盗作した推理の女王……192
伝統の香りゆかしいスパイ……195
元ギャングが描く暗黒街……198
SFミステリの醍醐味……201
'68年度のベスト・テン評定……204
殺されたのは記憶だった……207
ドーヴァー警部のお手柄……210
昔なつかしそっくりショー……214
ビートルズ並みの人気作家……217
マクリーン作品群の採点表……220
ダールが激賞した西部小説……223
名探偵ホームズのパロディ……226
リュウ・アーチャーの円熟……230

努力しないでお別れする法……233
あとがき 237
索引

装幀／徳野雅仁

〈'64・1〉ベスト・テンごっこの苦しみ



ベスト・テンの季節である。

ぼくは毎晩枕もとに一ダースの推理小説を積み上げる。その山を崩し終えるまで、眠ることはできない。なんと因果な責め苦だろう。

女房が背中を向けてくれているのはありがたいが、〝深夜の散歩〟も、これでは汗だくの重労働と変らない。こんな情けない羽目になったのも、もとはといえば、ベスト・テンごっこのせいなのだ。

滑稽にも完全主義者のぼくは、一冊でも読み落としがあると、もう駄目なのである。おそろしくて、順位などつけられない。しかし考えてみると、すべての本を同じコンディションで読めるはずはないし、翻訳の上手下手の関係もあって、完璧な順位づけなどナンセンスだ。おまけに、人によって好みの違いというものがあろう。

たとえば、ここに六二年度の翻訳推理小説のベスト・テンがある。マニアの集まりである「SRの会」が〝ミステリ界の知を結集〟して作成した表である。（カッコ内は二十人の投票者による採点の合計）

①ロス・マクドナルド『ウィチャリー家の女』(126)
②マッギヴァーン『ファイル7』(115)
③デュレンマット『嫌疑』(94)
④ロイ・ヴィカーズ『迷宮課事件簿』(70)
⑤フレドリック・ブラウン『まっ白な嘘』(62)
⑥イアン・フレミング『サンダーボール作戦』(60)
⑦ミシェル・ルブラン『不許複製』(59)
⑧フレッド・カサック『連鎖反応』(50)
⑨ロイ・ヴィカーズ『百万に一つの偶然』(40)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

⑩ヘレン・マクロイ『幽霊の2/3』(36)

対象とした作品は百三十篇。投票に参加したのは二十人。一位の『ウィチャリー家の女』には、このうち十五人の票が集まったが、中島河太郎、双葉十三郎、河野典生氏ら五人はこの作品に票を投じていない。二位の『ファイル7』には、常盤新平、中原弓彦氏ら四人がソッポを向いているし、三位の『嫌疑』は、結城昌治氏ら四人が白票だ。もちろん読み曳らしたための欠票もあるだろう。しかしそれ以上に大きく〝好み〟が投票を左右しているものと考えられる。

各人の好みの差がいかに大きいかは、百三十篇の作品のうち五十四篇がなにがしかの票を獲得している中で、二十六篇までがそれぞれたった一人の支持者によって選ばれている事実をみてもわかる。現に、ぼくが十位にすべりこませたI・T・ロスの『女子高校生への鎮魂曲』には他に支持者がなく、九位に選んだロイ・ハギンズの『女豹』は、わずかに小泉太郎、紀田順一郎両氏によって支持されているにすぎない(小泉氏は『女豹』を二位に推しているが、これはおそらく翻訳の良さを買ったものだろう。たしかに稲葉明雄氏の訳したハギンズは、志野の名碗ですする即席ラーメンの趣きがあった)。

ベスト・テンは人気投票であり、冷静な客観批評ではないのだから、これでいいのかもしれない。問題は個々の作品評である。

「ミステリ評、ミステリ評、ミステリ評」と三回つづけて唱えると、どんなバッチイものを食べても当たらない――なんてお呪いが流行ったりする現状は、あれやこれやと読みあさる金も暇もない愛好者にとって、まことに困った事態といわねばなるまい。安心して頼れるガイド的批評こそ、いま一番求められているものではないだろうか?

そこで思い出されるのが、本格派全盛期にエラリイ・クイーンが提唱した〝科学的〟批評法だ。漫然たる印象批評にあきたらなかった彼は、推理小説の要素を「プロット」「サスペンス」「意外な解決」「解決の分析」「文体」「性格」「舞台」「殺人方法」「手がかり」「フェアプレイ」の十項目にわけて、それぞれを十点満点で採点、その総合点を批評の基準にしたらどうか、と主張したのである。

クイーンのこの主張には、たちどころにいくつかの欠点を指摘できるだろう。まず第一に、彼のあげている十要素の適否、さらにそれらの要素をすべて等価のものとみて機械的に総合点を出すやり方への疑問……。推理小説のなかにさまざまな流派が分化してしまった現状では、クイーンの方法は、たしかに古風で強引にすぎる。本格派とハードボイルド派を同じ物差で採点することは、無謀とはいわないまでもかなり困難であるにちがいない。

しかしそうした困難を克服してクイーンのアイデアを生かし、ある程度の共通項をとりだして客観的な採点の物差を作成することは、はたして不可能だろうか?

このエッセイでは、毎月の新刊を対象にして、そのような物差について考えていきたいと思っている。前記のベスト・テン作成に参加した人たちをふくめて、できるだけ多くの関係者の意見を聞きながら、話をすすめてゆくつもりである。

さて、この章で扱うのは、六三年九月初旬から十月初旬までに刊行された十二冊だが、このうち一応読むに値いするのは、長篇では、**ヒラリイ・ウォー『事件当夜は雨』**(That Night It Rained, 1961)、**ヘレン・ユースティス『水平線の男』**(The Horizontal Man, 47)、**ジャドスン・フィリップス『ささやく街』**

(Whisper Town, 60)、短篇集では、**カート・キャノン『酔いどれ探偵街を行く』**(I Like 'em Tough, 58)、**フレドリック・ブラウン『未来世界から来た男』**(Nightmares and Geezenstacks, 61)、早川書房篇**『名探偵登場⑥』**、別冊宝石**『世界の名探偵』**の計七冊である。残りの作品は、本屋の店頭で「あらすじ」を読んでおけばそれでいい。たとえばハドリイ・チェイスの愚作『とむらいは俺がする』は、扉の筋書を眺めて「ハードボイルドの主人公にしてはめずらしく金持」のボスが活躍する活劇ものだな、と納得すればそれで充分。もし余裕があって一二六ページを開き、「百姓のような」冴えない私立探偵のプロフィルを盗み見できれば、あなたはもうこの作品は読了したのと同じである。

ハヤカワ・ミステリなら裏表紙に、創元推理文庫なら扉に、それぞれついている内容紹介は、クイーンのいわゆる「プロット」であり、翻訳もののそれは、国産推理小説のコシマキにみられるような「巨匠畢生の名作」といった誇大宣伝はすくないから、安心して利用できる。「プロット」は、まず採点以前の共通要素として、作品選択の第一条件に挙げていいだろう。

つぎに、誰も異議を唱えそうにない要素として「翻訳」が考えられる。『水平線の男』は、さきに〈別冊宝石〉に訳出された『地平線の男』と同じ作品で、六三年度の翻訳推理小説ベスト・テンの上位にランクされるに違いない秀作だが、冒頭に巧みな伏線が張られており、この部分が翻訳者の腕の見せどころになっている。ところで、その一部を引用してみると――宝石版では「電光石火、下から突きあげられた火掻き棒に、頭蓋骨の底を打ち砕かれ」、創元版では「火掻き棒が電光のごとく彼の頭蓋骨の底まで打ちおろされ」――これでは、どちらを信用していいのか迷ってしまう。原文はつぎのとおりだ。

"He……met his death when the poker crashed, with a lightning upward blow, against the base of his skull."

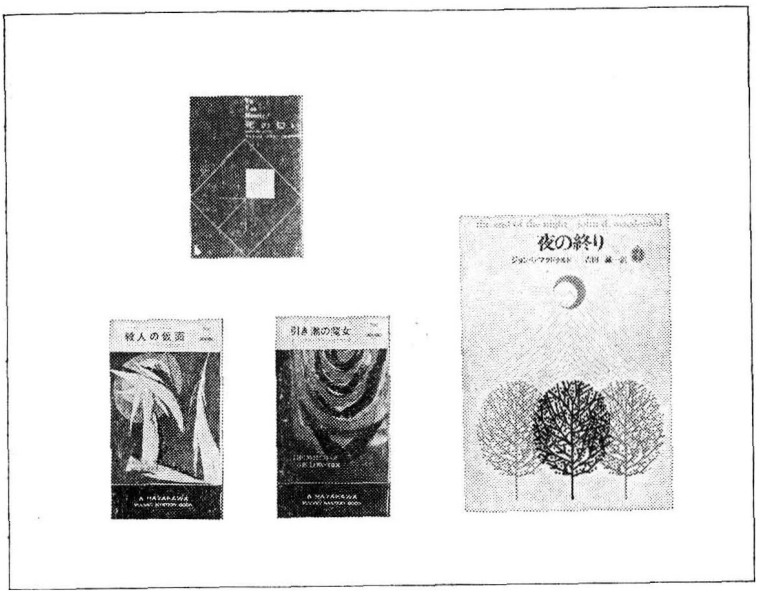
(ついでにいうと、異常心理による二重人格をトリックに用いた作品は、この他に『サイコ』などがあるが、『サイコ』が話題になったとき、誰もこの先駆的なエドガー賞作品に触れなかったのは何故だろう)

都筑道夫が訳したカート・キャノンなどを読むと、「翻訳」を採点の重要な要素に挙げたい気持ちはいっそう強くなる。ハギンズやキャノンは、日本語になって、男ぶりがすっかりあがった。

ところで、「翻訳」の観点からいうと〝素顔〟のままで紹介されているヒラリイ・ウォーとジャドスン・フィリップスだが、ここでは、性格設定に気を入れすぎて腰くだけになったフィリップス(ぼくの好みの作品だが)より、さりげなく装った文体のなかにきわめて意識的な方法を(少々退屈ながら)一貫させて成功しているウォーの一読を、おすすめしておきたい。

〈'64・2〉

もうひとりのマクドナルド



ジョン・D・マクドナルドの『夜の終り』(The End Of The Night, 60)を、五時間かかって、やっと読み終えた。一冊の推理小説に、こんなに時間をとられたことは、最近珍らしい。

この章であつかう翻訳ミステリは十冊だが、そのうちすでに雑誌で読んでいた『クランシー・ロス無頼控』と『十三階の女』の二冊の短篇集は別として、『夜の終り』についで時間がかかったのは、カーの『引き潮の魔女』(The Witch Of The Low-Tide, 61)とアルレーの『死の匂い』(Tu Va Mourir, 53)だった。といっても、それぞれ一時間半ずつで、カーター・ブラウンやブレット・ハリディに至っては、三十分以内に上げてしまった乱暴なぼくだから、まことに憎っくきマクドナルドである。

こんな乱暴な読み方をしてぼくが良心に恥じないのは、優秀な友人先輩のおかげなので、たとえばカーター・ブラウンに関してなら、中原弓彦氏とお茶を飲みながら、サワリのギャグを解説してもらった方が、はるかに身につくのだ。その伝で、マクドナルドも、田中潤司氏あたりに講義してもらおうと思いながら、ともあれ一応自己流の速読術で……とページをめくったのが運の尽きだった。

エイト・ビーチェス・ショーも、深夜劇場も犠牲にして、すっかり目が冴えてしまったぼくは、書棚の奥から〈HMM〉や〈マンハント〉のバック・ナンバーをひっぱりだして、マクドナルドの短篇を読み返す羽目となった(彼の長篇が翻訳されたのは『夜の終り』がはじめてだが、おそらく通俗作家というレッテルのために敬遠されていたのだろう)。

〈HMM〉には、五六年九月号の『悪者は俺に任せろ』(殺した女房の死体の腐敗を早めてアリバイづくりをするセールスマンの話で、これが日本への最初のお目見得作品だと解説にあ

る）をはじめ五篇ほどが紹介されていて、驚いたことにぼくはその全部を読んでいるらしく点数までつけているのだが、まるで記憶がないのには絶望した。とくに『懐郷病のビュイック』（五九年一月号）のごときは、89点というスゴイ採点にもかかわらず、四分の三近くまで読み返してみてやっと事件解決のカギを思い出す始末。この作品は、当然〝HMMアンソロジー〟に再録されてしかるべき出来栄えと思うので、この機会にストーリーをご紹介しておくと――テキサスの田舎町で銀行強盗があり、現場には一台のビュイックと運転手の死体が遺棄されていたが、いくら遺留品をひねくり回してみても手がかりがつかめず、事件が迷宮入りしかけたとき、町中のきらわれ者の少年が押しボタン式のビュイックのラジオに目をつけ、その六つのボタンが調整されている波長をたどって犯人を突きとめるという話である。題名（The Homesick Buick）が実にいいではありませんか。

こういう面白い話をきれいさっぱり忘れてしまえる才能というのは、かなり特殊なものにちがいない。ぼくはすっかり悲しくなって、なぜこんな連載など引き受けたんだろうと後悔しているところだが、いったん始めたものを中断するわけにはいかない。

そこで、前章で検討したミステリ紹介の物差にしたがって、まず「あらすじ」を読むとしよう。扉にはつぎのように書かれている。

「刑務所では群狼殺人事件の犯人、男三人と女一人の死刑が執行された。弁護士の覚え書き、犯人の獄中記などによって、彼らの恐るべき犯行の全貌が徐々に浮かびあがってくる。強盗、誘拐、暴行、殺人の狂宴！　いっさいの道徳倫理はもちろん、行為の必然性すら失って、その場の衝動にかられて凶悪な犯行を重ねる四人の若きサディストのグロテスクな生態！　ノン・フィクション・スタイルの迫力で六〇年度のベスト・ワンと絶讃された犯罪小説……」

つぎは「翻訳」だが――原書と読みくらべた人たちの採点では〝優〟だそうで、ぼく自身原文を調べたくなるような不自然な個所はなかった。

この作品の特長は、ひとくちにいって「構成」、語り口にある。冒頭、〝犯人たち〟が電気椅子で処刑されるありさまが、刑吏のひとりから親友にあてた手紙のかたちで物語られるのだが、彼らが一体どんな犯罪をやったのかは説明されない。つづいて紹介される弁護士の手記においても、〝恐るべき横断旅行〟とか〝第一級殺人罪〟とかいった漠然とした示唆があるだけだ。そして話は急に、結婚式を間近にひかえたヘレンという美しい娘がナイトガウンを脱いで、ゆっくりとお尻をかき、等身大の鏡に「乳房から骨盤にかけての白さをいちだんときわだたせている」裸身を映す場面に変る。

バット・マガーに『被害者を探せ』『目撃者を探せ』『探偵を探せ』といった、従来の探偵小説の逆を行った一連の作品があるが、この方式でいうと『夜の終り』はさしずめ〝犯行を探せ〟というところか。

実をいうと、ぼくのこの文章も『夜の終り』の真似をして、ワザと本筋に入らず、もって回ったいい方をしてみたのだが、どうやら収拾がつかなくなってしまったようである。年に三冊も四冊も本を書き、これまでに二千万部も売りつくしたというマクドナルドの腕をもってして、はじめて出来る芸当なのだろう。

『夜の終り』のもうひとつの特長は文体の密度である。とくに性格描写の丁寧さは抜群で、登場人物は端役に至るまで、その

容貌や生い立ちが説明されている。こういう〝ベタ力点〟の行き方は、えてしてドラマの効果をそぎがちだが、それを救っているのがさきにみた構成の巧みさなので、犯人たちは何をやったのか、それとヘレンはどう結びつくのか、ヘレンはどうなったのか――そうしたサスペンスで読者をひきずりながら、作者は犯人たちの人間像をじっくりと描きこんでゆくのである。いくぶん類型的ながらここには青少年非行という社会問題への肉迫があり、それを俗物である弁護士の目をとおして描くという手のこんだ操作によって、重層化に成功している（期待したほどではないが結末の意外性も用意されている）。この作家にこんなに文学性が濃いとは、いささか意外だった。

そういえば、アンソニー・バウチャーがこんなことをいっている――「ハードカバーの推理小説しか読まないという読者がいれば、ぜひ一度でいいからペーパーバックのオリジナルでマクドナルドを読んでごらんなさいとすすめたい。あなたは彼の作品を全部集めたくなるにちがいない」「読者がロス・マクドナルドとジョン・D・マクドナルドを間違えて、どちらを読んだとしても決して失望はしないだろう」

ところで、『夜の終り』が提出してくれる推理小説客観評価のための物差候補は「構成」と「性格」と「密度」である。ここでは諸氏の意見を参照して「密度」を採用しておきたい。一般に国産ミステリはやたらに行変えが多く、くだらない会話が目立ちすぎるが、逆に舶来品は活字がギッシリつまっていて時間を食う傾向がある。「原稿料が枚数計算になっている国と語数計算になっている国のちがいさ」と皮肉な見方をする向きもあるが、行変えが多いからといって「密度」がうすいということにはならないので、要は作者の燃焼度いかんだろう。いずれにしても、隙間風の吹きこんでくる安普請のようなミステリはいただけない。

『夜の終り』に枚数をとられて、他の作品にふれる余裕がなくなったが、暇があれば、アルレーの例によってサディスティックな悪女残酷物語『死の匂い』に目をとおすのもいいだろう。この作品は彼女の処女作だそうで、そういう興味はある。カーの新作『引き潮の魔女』も、フットレルやルルーの密室講義が出てきて、マニアには捨てがたいが、翻訳に難点があるようだし、ハリデイの『殺人の仮面』(Murder Wears A Mummer's Mask, 43) は相変らずよくまとまったシェーンものながら、忙しいあなたとしては「マイク・シェーンみたいな（浮気）常習犯を家庭につなぎとめるのは、ダービーの優勝馬にバタ屋の車を引かせるようなものさ」というセリフを記憶にとどめる程度でご免こうむりたいのではなかろうか。

〈'64・3〉 007号とガガーリン少佐

宇宙飛行士ガガーリン少佐が来日したとき、彼がはたして本物であるかどうかが、記者仲間で話題になった。ぼくはソ連大使館その他へせっせと足を運んで、熱心に彼を観察した。たしか晩春の汗ばむころだったが、青い地球を見たというやさしい目つきの小男は、軍服に身を固め、チェホフの登場人物のような色白の奥さんと連れ立って、いつもニコニコしていた。どんな質問に対しても感情を現わさず、録音テープのように反応するその態度をみているうちに、ぼくの心の中にひとつの仮説がふくらんできた。

「あの愛想のいいにこやかな顔、無邪気な大きな目、心理学的にみて大人としては単純すぎることなど、考え合わせてみると……催眠術をかけるには絶好の人物です。だから宇宙カプセルのなかでおそろしく複雑な動作を必要とされていたときは、ガガーリンはずっと深層催眠の状態で行動していたのではないでしょうか……」

『女王陛下の007号』(On Her Majesty's Secret Service, 63)の中で、秘密情報部員501号が、部長のMにそう報告するくだりを読んだとき、ぼくは思わずニヤリとして、女房にまたまたお尻をつねられた(女房にとってフレミングはわいせつな〝悪書〟にほかならないのである。彼女が目を輝かせてフレミングを燃やしている夢をぼくは毎夜のようにみる)。

ジェイムズ・ボンド・シリーズの十作目にあたるこの作品で、女王陛下の007号は、宿敵ブロフェルドがアルプス山中に奇妙な研究所をつくり、イギリス各地から十一人の田舎娘を連れてきて、深層催眠を施している事実をつきとめるのだ。ブロフェルドは一体何を企んでいるのか? 新聞広告で集められたイギリス娘たちは、いずれも鶏アレルギーまたは馬鈴薯アレルギーの患者であり、科学者に化けたブロフェルドにそれを治

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com